



カンボジアからの避難民を迎えるラジモハン・ガンジー氏 (1977年7月コー・マウンテンハウスにて)

インドは一九七七年の総選挙を控えて二十ヶ月にわたる非常事態を宣言した。その間、言論、集会の自由は極端に制圧され、ヒンマツト紙の主幹でもあるラジモハン・ガンジー氏らに対する出版の検閲もきびしく、まして出国も許されない状態にあったが、同氏はインドの自由と民主主義のために闘いつづけ、政権交替後のこの七月、久し振りにスイス・コーのMRA世界大会に出席し、次のように語った。

平野には

平野の問題が……

ラジモハン・ガンジー

四年ぶりでコーに参りました。思えば、初めてここに来たのは一九五六年、約二十一年前のことです。再びここに来たということとは私にとって大きな喜びです。

ここ数年、コーに来ることもなく、従って運営の責任も荷なうことなく過して来た外国人の一人として、ここにみなぎっている素晴らしい精神、そしてコーに発して世界各地に拡がって行ったさまざまな変化に対して、スイスとコーに対して賛辞を呈したいと思います。

今日は主として南北問題をテーマに話が進められています。南北問題は詮じつめれば世界の人間のパートナリシップの問題だといえましょう。今、世界各地で取り上げられているこのことも、コーが開拓したものなのです。二十一年前すでに私はコーで世界中の異なった人種が完全な平等を基盤として集まっているのを見ました。今日、世界の

各地でこうしたことが行われて
いますが、当時はコー以外では
見られなかったことです。コー
で見出したものは単なる平等で
はなく、必ずしも平等とは共存
しないもの、つまり友情があり
ました。しかも単なる平等と友
情、あるいはパートナーシップ
だけではありませんでした。

ここで私が見出したものは、
それ以上のもの—今もここで見
出すのが—でした。それは
人を個人として認め合うこと
です。黒人であるとか、茶色であ
るとか、白人とか黄色人種とか
、或いはスイス人であるとか、フ
ランス人、イギリス人、インド
人という風に人にレッテルを貼
ってしまふのでなく、個人とし
ての尊厳をもった人格として認
めるということです。これもコ
ーが他に先んじたことで認めら
れて然るべきだと思います。

貧困に対しては、当然、闘い
を挑むべきです。たしかに貧困
は恐ろしいことです。しかし、
私たちは同時に、心の貪しさと
も闘うべきです。単に生活水準
の向上を目標とするのでなく、
生活の質の改善も求めるべきで
す。

忘れてならないことは歴史を

通じて、人類に奉仕した人たち
、また神に仕えた人たちは清貧の
徳を贅えたこととす。昨日、私
はある友人とこのことについて
話し合いました。この友人は旧
訳聖書の箴言の中から一節を示
してくれました。これは確かに、
「人の祈り」ともいえましよう。
「わたくしは二つのことをあ
なたに求めます

わたくしの死なないうちにこ
れをかなえてください。
貪しくもなく、また富みもせ
ず、ただ、なくてはならぬ食物で
わたしを養ってください。
飽き足りて、あなたを知らない
といい、『主とはだれか』と言
うことのないため、
また貪しくて盗みをし、わた
くしの神の名を汚すことのない
ためです。

貧困を減少するための闘いは
勿論進められなければなりません
。私の国インドは、最近二年
間悲しい経験をしました。報道
言論、集会の自由、選挙など民
主主義的生活に慣れた私たちは
二年間非民主的な生活を過した
のでした。自由よりパンの方が
大切だ、などといういい始める人も
いました。

私たちの何人かはこの考え方

の誤ちを正すため、精一杯の努
力をしました。答は明白です。
パンも大切だが、自由も大切、
両者とも欠くべからざるもの、
ということとす。この他に私た
ちは次のような論戦を展開しま
した。

第一に、非民族的形態が必ずしも
パンの供給を増すことは証明出
来ないことを力説しました。こ
の場合、私たちはしばしば日本
を例にあげました。言わせて頂
くなら、戦後の日本は、民主的
なあり方で経済を大きく発展さ
せたことをのべたわけです。

次に一歩ゆづつて非民主的形
態が富を急激に増加するものだ
と証明出来たとしまししょう。結
構なこととす。しかし、自由を
求める気持は変わりません。人は
パンのみで生きる者ではないの
です。確かにパンは重要ですが、
人はパンのみで生きる者ではな
いのです。

二年の間、私たちはこのよう
な状況下で過しました。今日、
民主主義を取り戻したインドは、
民主主義下の問題を抱えていま
す。最近、私はオーストリアの
クライスキー首相にお会いする
機会を得ました。「二年間独裁
政治の問題に悩みましたが、今

は民主主義の問題に悩まされて
います」と言いますと、首相は
次のように答えられました。
「ブレヒトは面白く表現して
いますよ、『山には山の問題が
あるが、平野には平野の問題が
あるものだ』と」

インドは今、平野の問題を抱
えています。民主主義の問題は
基本的には何かといえば、自由
を持った時、人は放埒に耽溺す
るか、自制するかのいずれを選
ぶかということでしょう。

民主主義の社会に生きる各人
は選択を迫られているといえま
す。自我に支配されるか、良心
の声に従うかのいずれかです。
自我を選ぶか、良心の声に従順
であるかです。自制か、耽溺か、
あなたも私もこの選択を迫られ
ているのです。

独裁の下では、個人は責任を
逃れることも出来ません。成功も
失敗も一人の責任です。大衆に
は責任は無いのです。民主主義
は一人ひとりが参加することと
す。独裁は逃避であり、民主主
義は参加を意味し、私たち一人
ひとりが選択しなければならな
いのです。重ねていいます。自
制か、耽溺か、自我の支配に委
ねるか、良心に従順になるかで

す。金力、権力、虚栄、地位等
に耽溺することもできます。

いかに富を創造し、保持し、
分配するかが今日、世界の話題
となっております。殊に分配に関
しては関心も深く、多く言及さ
れています。

私は富をいかに使うかという
ことも考えるべきだと思います。
私たちは富を終局の目的とする
か、手段とするか考えなければ
なりません。富を主人とするか、
召使いとするかです。これは日
本とか、ヨーロッパの国ぐにと
か、アメリカのような大国に限
らず、世界中の産油国といわず、
貪しい国の富める人たちにも言
えることです。

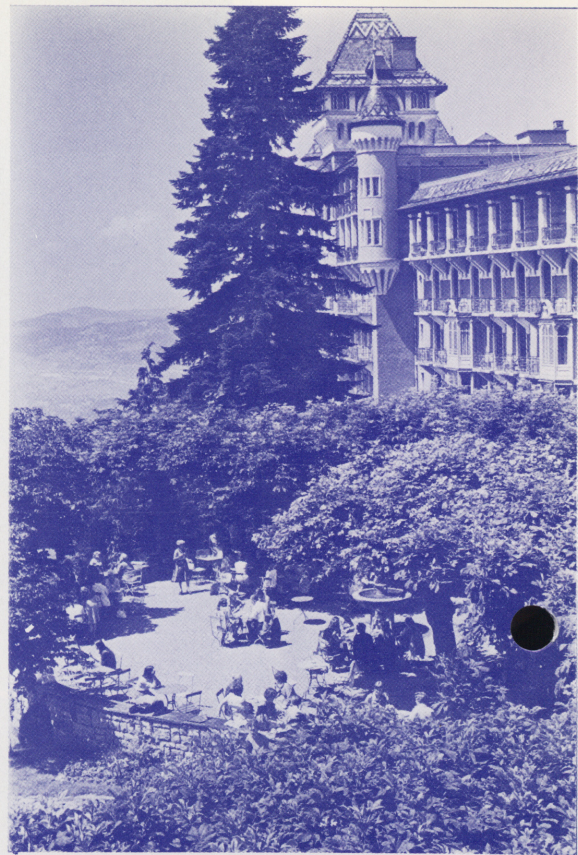
誰を貪しい国の富める人とい
えましよう。地球上の最も惨め
な人びとより暮し向きの良い人
はみな豊かな人です。したがっ
て富をいかに使うべきかの間に
対して、豊かな人—私たちを含
むすべての人が良心に照らし
て答なければならぬこととす。
どのように私は自分の富を使用
しているか、自分の国はどのよ
うにその富を使っているかを考
えるべきです。

この間は感傷的にでなく、真
第8頁に続く

1977年 MRA 世界大会より



大ホールでの集会（産業人会議より）



会場のマウンテンハウス



芸術家会議も連日行われた



歌も大会を盛り上げる大きな役割



ドイツ劇の一場面

各国代表の出迎えをうけ挨拶される東芝の高瀬常務さん



夜の催し物を楽しまれる東芝のみなさん

笑顔の中にも厳しさのある東芝労使の会合



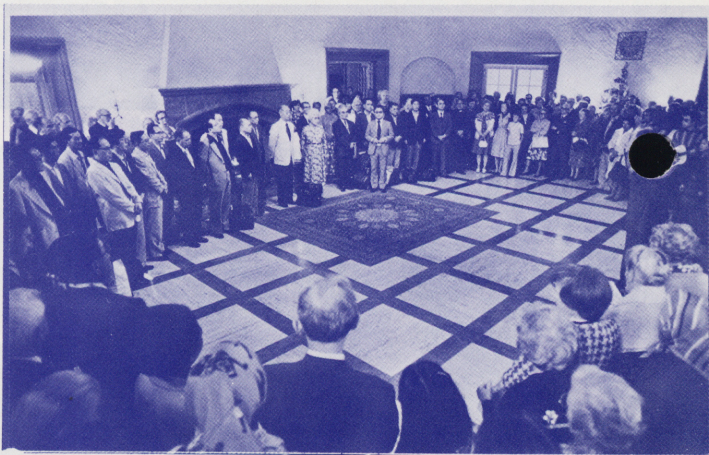


全員集合の郷友連盟のみなさん(マウンテンハウスの庭で)

郷友連盟の夫人のみなさんたち



スイス建国記念日に披露された古典ダンス



出迎えをうける総合労研グループ一行



発表に耳を傾ける若者たち（青年会議より）



クッキングチームは大会の陰の功労者



話題の人シューマツハ氏（右）とフィリップス（左）

MRAと私

長野 清志

MRAの海外でのトレーニングに参加して既に一年以上たつてしまいました。MRAの何たるかを十分に理解しないまま飛び出してしまい、最初は大いに戸惑いました。そして今は、この闘いが自分の一生を通してのものとなり、今正にその緒に付いたところであると気付きました。MRAは世界を再造しようとしています。そして先ずそれには自分自身を変えることから出発しようというものです。

『人が変われば国が変わり、国が変われば世界が変わる』やはり現在この世界のさまざま問題を引き起こしているのは、体制の如何を問わず人であり、器をいくら取り換えようとも濁った水それ自体の清くなるはずもなく、やはり水そのものを変えなければなりません。それではどうやったら自分自身を変えることが出来るのか？、私自身決して自分に満足していたわけでもなく、変われるものなら大いに変わりたいと思つていま

重荷だったものが消えていくのを感じました。しかし、恐れや嫉妬、そして自分本位の考え方など絶えず雑草の如く、自分の心におい繁つて来るのも事実です。ですから毎朝、静かな時間を持つて、内なる心に聴き正しい判断を求めることは必要不可欠となります。そして人は誰も、より良い社会を作るために果たすべき役割が用意されており、もし私たちがその決心をしさえすれば、その内なる声は何をなすべきかを伝えてくれるはずで

MRAと私

中島 竹司

偶然MRAに出合い、早いものでヨーロッパに赴き、二年余が過ぎ、先頃母国である日本に帰ってきました。振りかえつてみて、その間の経験は「これこれしかじか」だと言うほど限定されたものではありませんが、

自分の中の願い

大村 治

『或る願い』または『或る欲求』というようなのが、私の中でくすぶっている。それが今

す。誠に平凡な日本人にすぎぬ私にも私なりの役割が、より良き世界を造るという大きな目的の中に用意されていると確信します。そして今、イギリスでのトレーニングを受けている訳ですが、少しでもイギリスの為に役に立ちたいと念じる一方、我祖国である日本への責任を果たすということ、すなわち、より良い日本の建設というものを通し、世界に貢献するということの為、微力ながら、精一杯働こうと決心している次第です。

ではその『或る願い』又は『或る欲求』とはどのようなものか、といえは、それは何かある永遠のもの、死なないものに自己を託するというか、乗せて行くという、そういうものなのです。私自身の中には、目先の成就する目的の為にのみ生きることの無意味さやむなしさがあると同時に、永遠に続くべきものに向つて自分を生かして行きたいという根本的な生への願いがあるわけです。言いかえれば、この『願い』は肉体が死んでも、滅びないわけですから、この願いに自己を完全に託して生きるということ、自分がいつまで生きるかとか、何才で死ぬとか、ということとは問題ではないわけです。

それではその永遠の願い、というものはどういうものか、それは森羅万象、この地上のあらゆるものが、平和に生きられる世界、全てが救われていく道、とても言つたらいいでしょうか。私としては、社会の中で、この願いとは正反対の自己矛盾、罪と偽りの行為を日々犯しながら、やはり一方では、この永遠の世界に自己を託することを願わざるを得ないのです。

第2頁より続く

の責任感をもって問われるべきですが、それにも増して良心の光に照らして問われなければならぬものです。

それと同時に、これからの人も助けを必要としている人も、貪しい人も、発展途上国も、それぞれこの問を良心に照らして問うべきでしょう。さしのべられる援助を受ける能力が私にあるだろうか。私の国はそうした援助を必要などころに正しく用いることができるだろうか。すでに富んでいる人びとを更に富ませるようなことに使われる弱味がありはしないだろうか。

これらは私どもが現在、直面している幾つかの問題です。それに対する私の基本的な考え方を以上のべましたが、過去三十余年に亘って人間性が変革し得ることが証明され、さらに世界状況の変革もまた確実に可能であるという希望が生れているこのコーでお話出来たことを感謝するのです。

MRAアジア・太平洋地域国際会議!!

1978年1月7日から15日までオーストラリアのブリスベンで開催される「新しいゴールをめざして」と題する大会の招せい状は次のように呼びかけています。



現在のわれわれの目標は十分ではないのです。物質主義の社会はそれなりの成果を取めてはいるものの、自らが造り出す多くの問題—インフレ、失業、分裂、暴力、家庭の崩壊、生き甲斐の喪失等—を解決してはいません。

今こそ新しいゴールが必要です。

一、民族間のパートナーシップ

差別も温情主義も、苦々しい感情もなく。

一、世界の切なる必要に応える企業

対立、競争を超越した共通目的をもって

一、資源のすべて（農産物も鉱物も）は全人類のために

一、家庭生活は創造的で、楽しく、永續きするものに

一、教育は社会の不正を是正する動機づけを与えるものに

但し、自ら改めることから始めること

我われは太平洋をその名の通り「平和な海」にすることも出来るのです。真の平和は太平洋地域のくくが互いに情熱を持つていたわり合い、自らの内なる破壊的な力に打ち勝ち、創造的な力を解放する時に得られるのです。

マイケル・ソマリ（パプア・ニューギニア首相）

一九七七年ニュージールランドで開催されたMRA大会へのメッセージより

私たちアポリジニ（オーストラリア原住民）と豪洲白人、マオリ（ニュージールランド原住民）とパケハ（ニュージールランド白人）そして太平洋諸島に住む者が力を合せる時、世界に向って新しい生き方を示すことができるでしょう。皮膚の色は問題ではなくなります。神の計画は何ものにも増して偉大であるからです。

レジ・プロウ（アポリジニ行政官）

ニュージールランドのMRA大会にて

世界のより貪しい兄弟たちの犠牲の上に、われわれが経済的により大きい分前をとることは道義的に間違っています。他の国に対して責任を負うとき、われわれの経済問題も解決されるでしょう。

テッド・アーチャー（西オーストラリア店員組合産業部門担当）

神の導く調和の前にどんな難問でも解決されます。手には職を腹には食物を、そして空虚な心には真に満足を与える思想で満たされます。

フランク・ブックマン